

県立併設型中高一貫教育校としての 新たな学校づくりへの挑戦（Ⅱ）

—新設の県立中学校の基礎づくりを目指した実践的取組—

真 部 健 一

A Challenge to Creating a Prefectural Joint-Type
Lower and Upper Secondary School (Ⅱ)

—Practical Tackling for Laying the Foundations of a Prefectural Junior High School—

Ken'ichi MANABE

【要 旨】

県内初の県立の中高一貫教育校として誕生した大分豊府中学校は、その学校づくりの推進にあたって、潜在的な能力や可能性を引き出す教育を基本に、確かな学力の向上、豊かな人間性の育成、たくましさ豊かな感性をはぐくむ部活動の充実を4つの大きな柱として、創意工夫を凝らした教育課程編成や特色ある教育活動の展開に取り組んでいる。本稿では、豊富な授業時数の確保と、授業時数の効果的な運用を図るための各学年や教科への配当の工夫、学校設定教科「コミュニケーション」や学習習慣の確立をめざす「豊府タイム」の新設、各種検定等への挑戦、総合的な学習の時間を積極的に活用した特色ある取組、中高合同の学校行事や部活動の活性化等についてその内容や取組を具体的に示すとともに、「学力向上」、「豊かな人間性等の育成」、「部活動の活性化」の視点から、平成19年度・20年度の取組を中心にその成果と課題についてまとめた。

【キーワード】

中高一貫教育、特色ある学校づくり、特色ある教育課程、学校経営

I. はじめに

教育改革の大きな流れのなかで、大分県教育委員会は2005（平成17）年3月に「高校改革推

進計画」を策定し、大分豊府高等学校に併設型中高一貫教育を導入し、2007（平成19）年4月1日に開校することを発表した。

併設型中高一貫教育校としての学校づくりは、県立として初めての試みでもあり、さまざま

まな課題が山積していた。土台となる大分豊府高校の教育理念やこれまで培われてきた校風や特色を活かし、さらにそれを発展させる学校づくり、中高一貫教育の制度の利点を活かした教育課程の編成、中高教職員の協働体制づくり、中高部活動の連携や活動場所の確保、中高一貫教育校としてのPTA組織・運営の在り方等、実にやりがいのある「挑戦」であった。

本学研究紀要第30号^{*1}では、県立中学校開校までの中学生受け入れに向けての体制づくり・生徒募集・入学者選抜検査に関する取組や、大分豊府高校の歴史と特色、大分県の高校教育を取り巻く状況等に簡潔に触れながら、中高一貫教育校としての学校づくりの基本的な視点や学校教育目標や方針、目標達成のための課題の設定等についてその概要をまとめてみたが、本稿では、新設の大分豊府中学校の特色ある教育課程編成や教育活動等についてその内容や取組を簡潔かつ具体的に示すとともに、平成19年度、20年度の教育活動を中心に、その成果と課題についてまとめてみた。

Ⅱ. 大分豊府中学校の特色ある教育課程編成・教育活動

1. 大分豊府中学校における教育課程編成の基本方針

(1) 編成の立場

教育課程の編成にあたっては、教育目標の達成を目指した教育構想のもとに、日本国憲法、関係諸法規、学習指導要領、大分県教育委員会の教育方針に基づき、「基礎基本を着実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」や「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」、「たくましく生きるための健康や体力」等の「生きる力」を備えた生徒の育成を目指した教育活動が実践できるよう、次の4つの柱を基本に編成した。

- ① 生徒一人ひとりの潜在的な能力や可能性

を引き出し、大きく開花させる教育活動の展開

- ② 中高一貫教育校の特性を生かした特色ある教育活動による確かな学力の向上
- ③ 幅広い社会性や豊かな人間性の育成
- ④ 心身の調和したたくましさ豊かな感性をはぐくむ体育・文化活動の充実

(2) 編成の方針

具体的な取組を行うために、以下の①～⑩を編成の方針として定めた。

- ① 社会の変化に対応できる資質や能力を養うという視点に立って、自己の能力や可能性を伸長し、豊かな心とたくましい実践力をもった生徒の育成に努める。
- ② 基礎的・基本的な内容を確実に身につけさせるとともに、多様な学習活動の展開と指導法の工夫・改善に努め、個に応じた指導の充実を図る。
- ③ 自ら学ぶ意欲や主体的な学習の仕方をも身につけさせるために、体験的な学習や課題解決的な学習の充実を図る。
- ④ 必要な知識や技能を身につけさせることを通して、思考力、判断力、表現力等の能力の育成を図る。
- ⑤ 生徒の学習負担に配慮して学習指導の一層の充実を図るとともに、授業時数を効果的に運用し、教育水準の維持・向上に努める。
- ⑥ わが国の文化や伝統に関する理解を深め日本人としての自覚やものの見方・考え方の基礎を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての基礎的資質を養う。
- ⑦ 人間尊重の精神や生命に対する畏敬の念を具体的な生活に生かせるよう、生徒の内面に根ざした道徳性の育成に努める。
- ⑧ 異年齢集団の交流活動を推進し、豊かな人間性や社会性の育成に努める。
- ⑨ 「生きる力」の基盤となる健康の保持増進と体力の向上を図るとともに、豊かな感性や創造性をはぐくむために、スポーツ・文化芸術活動の推進と健康教育の充実を努める。

⑩ 目標と照らし合わせて教育課程の実施状況を適切に評価しながら、見直しと工夫を加えるとともに、各種答申等、わが国の教育情勢や社会のニーズを的確に把握しながら改善を行う。

- ① 全ての教科の基礎となる国語力については、3年間にわたって強化を図る。
- ② 1年の数学においては、基礎計算力の強化を図る。
- ③ 1年の英語においては、導入期での基礎固めを図る。
- ④ 3年の社会・理科においては、高校の学習への円滑な連携を図る。

2. 大分豊府中高一貫教育グランドデザインの作成

大分豊府中高一貫教育の教育目標・方針・内容、特色ある教育活動、高校での学級編成等をわかりやすく図解で示したグランドデザインを毎年作成し、保護者等に配布してきた。

3. 学力の向上に係る取組

(1) 豊富な授業時数

「基礎・基本の徹底と確かな学力の向上を図るとともに、生徒一人ひとりのもつ潜在的な能力や可能性を積極的に引き出し、知的探求心を存分に養い、創造的な知性を大きく伸ばさせる」という教育方針のもと、生徒の負担等にも配慮しながら、豊富な授業時数の確保に努めた。

各教科等の授業時数の設定、各学年への配分等については、次の①～④の視点を基本とした。

平成19年度の大分豊府中学校の年間授業時数配当表(表1)及び公立中学校における標準的な年間授業時数配当表(表2)を次に示す。

表1、表2から、公立中学校の標準年間授業時数は各学年とも980時間(週28単位時間)であるのに対して、大分豊府中学校では1,050時間(週30単位時間)と3年間で210時間多いことになる。

授業時数の多い教科等は、国語、社会、数学理科、英語、学校選択教科「コミュニケーション」を含む選択教科であり、3年間の増加時間数は表3のようになっている。

なお、平成23年度は、1085～1120時間の年間授業時数で、週31～32単位時間の授業を実施している。

学校設定教科である「コミュニケーション」を含む選択教科については、国語、数学、英語等に重点を置き、表4のように授業時数を設定した。

表1 平成19年度大分豊府中学校年間授業時数配当表*2

	国	社	数	理	音	美	保	技
1年	140	105	140	105	45	45	90	70
2年	140	105	105	105	35	35	90	70
3年	140	100	105	100	35	35	90	35
計	420	310	350	310	115	115	270	175

	英	道	特	選	コ	総学	合計
1年	140	35	35	0	30	70	1050
2年	105	35	35	85	35	70	1050
3年	105	35	35	130	35	70	1050
計	350	105	105	215	100	210	3150

* 1単位時間は50分

表2 平成19年度公立中学校年間授業時数配当表

	国	社	数	理	音	美	保	技
1年	140	105	105	105	45	45	90	70
2年	105	105	105	105	35	35	90	70
3年	105	85	105	80	35	35	90	35
計	350	295	315	290	115	115	270	175

	英	道	特	選	総学	合計
1年	105	35	35	0	100	980
2年	105	35	35	75	80	980
3年	105	35	35	105	130	980
計	315	105	105	180	310	2940

* 1単位時間は50分

表3 平成19年度大分豊府中学校における教科等の増加時間数(3年間)

国	社	数	理	英	選+総学	計
+70	+15	+35	+20	+35	+35	+210

「裁判員制度」について講演会も実施)
 ・ポスターセッション「大分の先哲に学ぶ」……志高く夢に向かって努力した郷土の先哲の業績とその生き方を学び合うなかで、これからの自分の生き方のヒントをつかむ学習

表4 平成19年度大分豊府中学校選択教科授業時数

	国	数	英	コミュニケーション	計
1年	*	*	*	30(国10、英20)	30
2年	15	35	35	35(国15、英20)	120
3年	20	55	55	35(国15、英20)	165
計	35	90	90	100	315

(2) 学校設定教科「コミュニケーション」の新設

「国際社会でリーダーとして活躍するたくましい人間の育成」を目指すとき、国際社会に対応できるコミュニケーション能力の育成は極めて重要である。日本語や外国語による「聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと」の指導を通じての基本的なコミュニケーション能力の育成や、わが国や世界各国の伝統や文化、社会問題等の指導を通じての国際社会に対応できるさまざまなコミュニケーション能力の育成を目標に、学校設定教科「コミュニケーション」を新設した。

具体的には、国語、英語による聞き取り、朗読、暗唱、スピーチ、ディベート、ディスカッション、プレゼンテーション、小論文等の学習を通じて、自分の考えをもち論理的に意見を述べる能力や、目的や場面などに応じて適切に表現する能力等を育成しようとするものであり、時間数を前掲の表4のように配当した。

「コミュニケーション」の授業等で培われた生徒のコミュニケーション能力は、「総合的な学習の時間」の発表会等を、その成果を発揮するための場として位置づけている。

「コミュニケーション国語」における活動の実践例を紹介する。

- ・「塾の是非」について、根拠をあげて討論するディスカッション
- ・『高瀬舟』を教材に、「安楽死」をテーマに討論する「裁判員制度に学ぶ」(裁判官を講師に招き、

(3) 豊府タイム

大分豊府中学校では、開校1年目の平成19年度は、月曜から金曜まで1日6時間の授業を実施し、6校時の終了後15時15分から30分程度を「豊府タイム」の時間として設定した。

この活動の当初の目的は、英語等の学力の定着・向上を図ることと、教え合い学習や面談等を通して、学習習慣の確立を目指すことであり、内容としては15分間の英会話トレーニングに加えて、時期等に応じて個別指導や質問教室、面接、教え合い学習等を計画的に行った。

その後、数学計算ドリルや漢字ドリルも組み込まれ、平成22年度には、「朝の会」の前の8時5分から8時35分の時間帯に移行して、10分間の「朝読書」、10分間の「基礎英語」、10分間の「基礎学力トレーニング」(国語の語彙力トレーニングと数学の計算力トレーニングを隔日で実施)を行い、基礎学力の定着を図っている。

(4) 少人数指導等

数学と英語においては、学習内容に応じて少人数授業やティーム・ティーチングによるきめ細かな指導を行っている。

また、数学においては、中高一貫教育校としての教育課程の特例を活用して、高等学校の内容の一部を中学校に移行し、より系統的な学習を展開している。

(5) 「本物」に学ぶ多彩な体験活動

生徒たちには、「鴻鵠の志」を持つことを訴えてきた。そのためには、日本で、そして世界でプロとして活躍している「本物」(プロ)と呼ばれる方々との出会いが重要である。一流の人々との出会いは生徒の知的好奇心や視野を広げるだけでなく、一生忘れることのない「魂を揺さぶる感動」を与えてくれる貴重な機会となるであろう。

実践例を紹介する。

- ・修学旅行（東京）における「大分県出身の先輩に学ぶインタビュー活動」（4の（1）参照）
- ・日本や大分県の伝統文化を学ぶ「能楽体験」や「竹芸講座」

（6）各種検定への挑戦

生徒自ら目標を設定し、主体的な学習を通して学力を身につけさせるとともに、将来につながる資格を取得させることを目的に、各種検定に積極的にチャレンジさせている。

具体的には、漢字検定・日本語検定・数学検定・英語検定を年回数回ずつ大分豊府中学校を会場に実施し、中学校卒業までに全員3級（日本語検定は4級）の取得を目指そうと呼びかけている。

（7）豊府チャレンジキャンプ（HCC）

2泊3日のHCCでは、蒲江のマリンカルチャーセンターや国立阿蘇青少年交流の家等の施設に宿泊して、海や山での野外体験活動のほか、10時間程度の学習にも挑戦し、学力の向上や学習習慣の定着化を目指している。

平成23年度は、1年生が蒲江、2年生が阿蘇で教育合宿、3年生が湯布院で学習合宿を行った。

4. 総合的な学習の時間における特色ある取組

総合的な学習の時間では、平和と命について考える「生き方学習」や職場体験学習を通して望ましい勤労観の育成を図る「進路学習」、学校のすぐそばを流れ、生徒たちの生活と密接に結びついている大分川の現状を把握し、身近な環境に対して目を向ける「環境学習」等をテーマに学習を行っているが、1期生の3年時には、次のような豊府ならではの特色ある活動を行っている。

（1）郷土学習「日本が誇る大分人と出会う」

富士山登山、国会議事堂や東京大学訪問等の日本一を体験する修学旅行と組み合わせ、東京で活躍している大分県出身者との出会いを通して、今の生徒自身の在り方を見つめさせるとともに、自己実現に向けて気持ちを高めさせることを主なねらいとしている。

生徒たちは、アポイント取りから、訪問先の企業についての調べ学習を行うとともに、インタビュー内容の作成・送付、インタビューの練習等を行い、東京でインタビュー活動を実際に行う。

修学旅行終了後は、班ごとに礼状を作成し発送したり、インタビュー活動のまとめを行い、ポスターセッション形式で発表を行う。

（2）「卒業論文を書こう」

高校受験がないという中高一貫教育校としての特色を生かして、3年時の10月から2月にかけて卒業論文の作成に取り組む。生徒自身でテーマを見つけ、それに対し仮説を立てて実行し、分析・考察を加えるという卒論作成の一連の流れを通して、課題解決に主体的に取り組むスキルを身につけさせることを学習のねらいとしている。作成後は、学級内卒論発表会、代表者による学年発表会を行うことになっている。

5. 豊かな人間性、社会性、友愛の精神の育成に係る取組

（1）中高合同の学校行事

中学生と高校生が合同で学校行事を行うということは、中高一貫教育校ならではの特色である。発達段階が異なり体力的な差も現実には存在する状況のなか、合同で学校行事を行うためには困難な点もあり、さまざまな工夫が必要であるが、それ以上に兄弟姉妹的な人間関係、中学生の高校生に対する尊敬の念、高校生の中学生に対する思いやりの心等、豊かな人間性をはぐくむうえで貴重な教育活動の場となっている。

中高合同で実施されている学校行事には次のようなものがある。

- ・歓迎遠足（4月）
- ・豊饒祭（文化の部、体育の部）（9月）
- ・新春行事（1月）
- ・強歩大会（2月）
- ・生徒会役員交流など

（2）高校生サポーターによる質問教室

他校には例のない大分豊府独自の活動で、中学生が高校生から進路や学習についての指導やアドバイスを受けることができるという取組で

ある。

最初の質問教室は開校1年目の平成19年11月15日・16日の2日間、放課後を利用して試行的に行われた。高校1年生が、国語・数学・英語・理科・社会の5教科について中学1年生からの質問に答えるというもので、11月考査を前にして多くの中学生が質問に訪れていた。課題としては、高校生の試験日と中学生の試験日が重なったときは、高校生の対応が期待できないことがあげられ、今後この特色ある活動の在り方について検討を行う必要がある。

(3) 中高連携奉仕活動

大分豊府高校における中高連携奉仕活動は、1995(平成8)年度から1998(平成10)年度までの3年間、文部省(当時)の「勤労体験学習総合推進事業」で研究指定校に指定され、「普通科大規模進学校における体験学習のあり方」を研究主題として取り組んだことに端を発し、以後「地域における環境学習の実践の場」として、年2回実施してきた。

この奉仕活動は、日頃接点の少ない近隣の中学校・高等学校の生徒が、連携して奉仕活動に取り組むことにより、異年齢集団相互の交流を深め、勤労体験奉仕活動の輪を広げることや、大分川河川敷を中心とした環境美化活動を実施することで、地域の自然環境に対する意識の高揚を図るとともに、ボランティア活動を通して豊かな人間性を育てることを目的に生徒会を中心にを行い、2006(平成18)年には県知事表彰を受賞した。

2008(平成20)年からは、近隣の中学校や高校においても独自で奉仕活動等を行っている状況があり、大分豊府の中学生と高校生が連携して活動を行っている。

6. 部活動の活性化に向けた取組

(1) 6年間を見通した長期プランによる継続的・計画的な活動

高校受験がないという中高一貫教育の特色を生かして、中学校での36ヶ月間を部活動に継続的に、思い切り取り組むことができること、さらには、中高一貫の6年間を見通した長期プラン

による継続的・計画的な活動を行うことができることは、生徒一人ひとりの個性の伸長、競技力の知識・技能術の向上、豊かな人間性・社会性・友愛の精神の育成、体力や感性の伸長を図る上で効果的である。

なお、平成23年度の入部率は1年92%、2年94%、3年93%となっている。

(2) 特色ある競技等の開設

1学年3クラス規模の学校で、どのような部を開設するかということは難しい課題である。着任した当時の原案では、7つの運動部と6つの文化部が示されていたが、軟式野球部やサッカー部の名はあげられていなかった。練習場所の確保が困難であるというのがその主たる理由であったが、これらの部は豊府高校でも特色ある部であり、「6年間を見通した長期プランによる継続的・計画的な活動」を特徴とする中高一貫校としての部活動のあり方を考え、再度検討することにした。

大分市内の中学生の部活動の入部者数や割合を調査し、部活動入部予測を綿密に行い、部活動設置案を作成した。中高一貫教育検討委員会、運営委員会、職員会議で十分議論を尽くし、最終的に次の16部の設置を決めた。

【運動部】

陸上競技、硬式テニス、弓道、フェンシング、サッカー、バレーボール、バスケットボール、卓球、野球、柔道

【文化部】

吹奏楽、美術、放送、書道、演劇、茶道

その後、2010(平成22)年に新聞部が設置され17部となった。その中で、中高合同で活動を行っている部は、柔道、弓道、フェンシングの運動部4部とすべての文化部7部である。

また、大分豊府中学校にしかない、あるいは少数の中学校でしか設置されていない部としては、フェンシング、弓道、硬式テニス、書道、放送の各部があげられる。

なお、サッカー部、野球部の練習場所については、高校の当該部活指導者の協力により本校グラウンドの時間差による利用がある程度可能になったことや、大分市の管轄のスポーツパークや河川敷を活用することで、何とか部活動として設置できるようになった。ただ、河川敷の場合、大雨のたびに川の水につかりグラウンド整備に多くの時間や経費がかかるなどの困難な状況が続き、途中で使用をあきらめざるをえなかった。練習場の確保が依然大きな課題となっている。

(3) 中高の合同練習や指導者の交流

中学校の規模が小さいため、教員配置数も少なく、部活動の指導者の確保が容易ではなかった。特に専門的な指導を必要とする競技等においては、部活動の運営そのものがない状況があり、部活動設置に関して、次のような「基本的な考え方」と「運営方法」を定めた。

【基本的な考え方】

- ① 本校教育方針に則り、積極的な部活動を展開し、学校の活性化を図る。
- ② 中高の6年間を見通した、一貫性のある実施形態を工夫する。
- ③ 運動部に関しては、継続的・計画的な運用により、競技力の一層の向上に努める。

【運営の方法】

- ① 高校の運営方針に基づき、中高の教職員が互いに調整しながら、円滑な部活動の運営に努める。
- ② 中学校設置部の基本的な活動形態は概ね次のとおりとする。
 - ア 中高がそれぞれ単独で活動するもの（中学校指導者配置）
 - イ 高校が母体となって活動するもの（中体連加盟競技の場合は、中学校引率者配置）
 - ウ 単独を原則とし、必要に応じて合同で活動するもの（原則として中学校指導者配置）
- ③ 中学校の教員配置計画と連動させながら、中学校指導者の確保に努める。

7. 教職員の指導力の向上・連携のあり方の研究

学校教育目標の達成を目指し、活力ある学校づくりを推進するためには、教職員の指導力を

向上させ、教育活動のレベルアップを図ることが重要となる。指導力を向上させるためには、さまざまな研修会や研究会への参加、先進校訪問等により自己研鑽を積むことは教員としての基本的な姿勢であるが、学校という教育現場の中で、組織的な取組を行うことも大切である。

指導力の向上を図るための中高連携した取組の主なものを紹介する。

(1) 週1回の中高合同の教科会議の実施

中・高それぞれの教科指導に対する相互理解を図ったり、中学校への発展的な学習の導入に対する検討などを行う。

(2) 年2回の授業参観週間(E-Week)の位置づけ

年2回授業参観週間を設定し、中高相互の授業を参観し合い、指導方法の違いなどについて理解を深めるとともに、効果的な指導法の研究を学ぶ機会としている。

(3) 中高一貫教育先進校への学校訪問

主に関西以西の中高一貫教育先進校を訪問し、そこで学んだことを全教職員に環流報告を行い、教科指導や各分掌の取組の改善に役立たせるようにしている。

Ⅲ. PTA 活動・組織の中高連携について

中高一貫教育校のPTAについては、県内に事例もなく、組織や規約、役員構成、活動のあり方、会費等数多くの解決すべき課題が山積していた。2006(平成18)年度に、大分豊府高校PTA役員が併設型中高一貫教育の先進校である長崎県立長崎東中学校・高等学校を訪問し、収集した多くの情報をもとに、長田教雄PTA会長、荒木浩子副会長(当時)等執行部が中心となり規約や組織等について原案を作成し、2007(平成19)年度の総会で承認された。

開校1年目は、まだ1学年だけであり、また、高校のPTA活動に対する馴染みもなく、特に中学校の役員の方々にはご苦勞も多かったことと思われるが、PTA会長や副会長をはじめとする役員の方々の強力なリーダーシップのもと、無難なスタートをきることができた。

IV. 成果と課題

大分豊府に中高一貫教育が導入されて今年で5年目を迎えている。大分豊府中学校第1期入学生たちも心身ともにたくましく成長し、高等学校2年生として学習に、部活動に元気に取り組んでいるようである。1期生にとっては来年度が中高一貫教育最後の学年となり、その評価について十分な検討が行われることになる。ここでは主として平成19年度・20年度の教育活動をもとに、成果や課題を考察してみる。

1. 成果

(1) 学力向上について

大分県教育委員会では、平成15年度から「県内小・中学校児童生徒の学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容の定着状況を客観的に把握し、指導内容や指導方法の改善・充実を図ることにより、児童生徒の確かな学力の向上に資する」ことを目的に、県内全ての国公立・私立の小学校、中学校を対象に「基礎基本定着実態調査」を毎年4月に実施している。

中学校については、第2学年生徒を対象として、国語、数学、英語の3教科で「中学校第1学年の学習内容」について調査を行っている。この調査への大分豊府中学校の参加は平成20年度からであり、各教科における難易度別の正答率は表5のようになっている。

なお、「目標値」については、次のように説明されている。

学習指導要領に示された内容について標準的な時間をかけて学んだ場合、小問ごとに正答できることを期待した児童生徒の割合を示している。(中略) なお、教科・領域・観点・問題の内容(中領域)ごとの目標値は、設問ごとに設定した目標値をもとに算出している。

1期生～4期生とも各教科の正答率は基礎、応用ともに目標値を大きく上まわり、学力向上の取組は成果をあげていると判断される。

各種検定については、漢字検定、日本語検定、数学検定、英語検定の3級(日本語検定に

表5 大分豊府中学1～4期生の各教科の難易度ごとの正答率

	国語		数学		英語	
	基礎	応用	基礎	応用	基礎	応用
1期生	94.7	82.6	94.3	93.6	94.1	90.0
目標値	65.5	50.0	48.0	40.0	63.7	44.4
2期生	86.9	70.6	91.4	88.4	95.7	84.5
目標値	66.0	54.2	60.6	53.9	70.9	52.1
3期生	91.6	71.8	92.5	88.8	95.4	85.7
目標値	72.5	53.3	65.6	60.6	73.3	51.9
4期生	92.1	71.9	92.6	83.0	96.1	87.4
目標値	72.0	46.0	72.4	46.9	69.7	49.4

(「平成20年度～23年度基礎・基本の定着状況調査」《大分県教育委員会》による)

については4級)以上の取得を目指して積極的にチャレンジしており、平成23年4月末現在、2級、準2級を取得している生徒数は、1期生から4期生まで通算して、漢字検定で61名、英語検定で37名に及んでいる。なお、漢字検定においては、2008(平成20)年3月に「奨励賞」を受賞している。

(2) 豊かな人間性、社会性、友愛の精神の育成について

豊饒祭(体育の部、文化の部)や歓迎遠足、中高連携奉仕活動等の中高合同の学校行事、生徒会中高合同役員研修会や高校生サポーターの実施などの異年齢集団による活動、学年単位で毎年実施される2泊3日の豊府チャレンジキャンプを通して、豊かな人間性、社会性、友愛の精神の育成が図られている。

また、日本一を体験する修学旅行では、富士山登山への挑戦や日本のリーダーとして活躍する大分県出身者へのインタビュー活動等をおおして、心身ともに大きく成長した。

なお、富士山登山に関しては、1年次に霊山登山、2年次に由布山登山を体験させるとともに、富士山登山の専門家を招聘し、納得のいく説明を受けるなど万全な準備を行ったことが成功への大きな要因になったと言える。

豊饒祭や日本一を体験する修学旅行等は「感動・理知・友愛」の校訓に掲げられた「魂を揺さぶる感動」体験の場であるが、裁判官、大使

館職員、外務省・国土交通省の職員、医師、弁護士等、その道のプロの招聘による講演等による感動体験は、高い志を抱き、自己の生き方を考える上で貴重な機会となっている。

(3) 部活動の活性化について

開校1年目、1年生だけの部員でスタートを切った部活動も年々充実し、2011(平成23)年7月現在全校生徒の約9割が部活動に入部し、放課後2時間程度の時間を効果的に使って活動を行っている。特に中高合同で活動を行っている弓道部、フェンシング部等の運動部や吹奏楽部、書道部、演劇部、茶道部等全ての文化部では、高校生とともに活動することにより、技能・技術の向上に対する刺激やアドバイスを受たり、人間性、社会性、友愛の精神の育成にとって貴重な経験を積んでいる。

これまでの部活動の主な戦績は、次のとおりである。

テニス	全九州選手権大会大分県予選 女子団体(2008) 優勝 女子団体(2009~2011) 準優勝 男子団体(2011) 優勝
相撲	県新人大会(2008) 団体3位 中学県総体(2010) 個人準優勝
サッカー	県選手権大会(2008) 3位
軟式野球	中学市総体(2010) 4位
弓道	県中学生大会(2009・2010) 男子団体(2011) 優勝
柔道	県新人大会(2008) 個人2位
フェンシング	全国少年フェンシング大会 大分県選考会 個人1・2・3位

(大分豊府中学校平成22年度学校案内「羅針盤」)

2. 課題

大分豊府中学校第1期生も大分豊府高等学校に進学し、高校からの新入生たちとともに高校生活を送っている。6年間の中高一貫教育の4年が終了した段階ではあるが、中高一貫教育校として、学校目標達成に向けた中学におけるこれまでの教育活動をふりかえり、そして、高校でのこれからの教育のあり方を見通して、今後取り組むべき課題をあげてみる。

(1) 学力の向上

- ① 質の高い効率的な学習の促進
- ② 魅力ある多様な学習活動の推進

③ 生徒一人ひとりの進路第一志望の達成を目指す指導の充実

④ 高校教員の中学校への「乗り入れ授業」の効果的な在り方の検討

⑤ 中学校における「発展的な学習」の指導のあり方の研究

⑥ 高等学校における進路(コース)に応じた指導のあり方の研究

(2) 豊かな人間性、社会性、友愛の精神の育成

① 感動体験を味わわせる教育活動の工夫

② 中高の交流の推進と交流活動の質的向上

③ 対人関係の構築力の育成及び教育相談活動の充実

(3) 部活動の活性化

① 6年間の長期プランによる継続的・計画的活動

② 専門性を備えた指導者の確保

③ 軟式野球部、サッカー部等の練習場の確保

(4) 中高一貫教育体制の確立

① 中高一貫教育としての新たなシステムづくりの工夫・改善

② 中高一貫教育に対する共通理解と効果的な連携に向けた相互理解の促進

③ 中高相互の教育課程の研究及び授業研究の推進

④ ①とも関連するが、中高一貫教育校としての特色ある教育課程等に基づいた教育を受けてきた生徒と、他の中学校から入学してきた生徒が共存するという状況を踏まえた、高校における教育のあり方の研究

V. おわりに

大分豊府中学校1期生、2期生は大分豊府高校の2年生、1年生として心身ともに大きく成長し、学習に部活動に活躍している。

高倍率の中学入試という試練を乗り越えて入学してきた生徒たちにとって、大分豊府中学校

での3年間は自己の学力を伸長させ、さまざまな感動を体験し、志の高い夢を描く上で素晴らしい機会であったと思う。しかし、また同時に、県内初の県立中学校ということに対する周囲の期待や関心の強さもあり、かなりのプレッシャーを感じ、心身ともに疲労し挫折しそうになることもあったのではないと思われる。

生徒の内面的なケア等の教育相談活動については、スクールカウンセラーの藤井昭義先生（現大分県学校心理士会会長・大分豊府高等学校第5代校長）の熱意あふれるご指導により、初年度から積極的かつ効果的に行われてきている。また、教職員対象の生徒理解やカウセリングのあり方等に関する中高合同の研修会等も計画的に行われ、教職員の意識の活性化も図られている。

大分豊府中学校は平成19年度からの2年間、文部科学省指定「問題を抱える子ども等の自立支援事業」の研究協力校に指定された。先生にはスーパーバイザーとして、教育相談活動や事例検討会等における指導助言、学級集団診断検査の分析や活用の指導等にもご尽力いただいた。中高一貫教育校である大分豊府の学校づくりを内面から支えていただいたことを、感謝を込めて記しておく。

大分豊府中・高の学校づくりは多くの人々が知恵をしぼり、汗を流し、情熱をもって取り組むことによって一步一步進んできた。中学校設立準備室の先生方のアイデアに満ちた原案づくり、中高一貫教育推進委員会のメンバーをはじめとする中・高の全教職員の熱心な取組、教育活動に意欲的に取り組み活力を与えてくれた中・高の生徒たち、PTAや同窓会、卒業生の保護者の後援組織である「豊流会」等、多くの方々の方強いご支援を受け、まずまずのスタートがきれたと考えている。中高一貫教育の学校づくりに携わった全ての人々との出会いに感謝したい。

最後に、大分豊府中学校1期生である小畑弥生さんの「卒業生からのメッセージ」を紹介する。

大分豊府中学校での日々で得たものそれは「人間力」だ。私はここで、いろいろな人と出会い、貴重な体験をする中で、人間として大きく成長することができた。

大分豊府中は「深く学ぶ場」だ。ここには、全県下から集まった志高い仲間がいる。「君たちならもっとできる!」と高みに導いてくれるアツイ先生たちがいる。そんな中での学習は確かに生易しいものではないが、刺激的で達成感がある。「わかるようになった。できるようになった。」と自信を持つことができた。「学ぶ」ことが好きになった。

大分豊府中は「人とつながる場」だ。個性的な仲間と出会い、部活動や行事に取り組む日々は、とても充実していた。合唱コンクールで流した悔し涙も、クラスマッチでの笑顔も、深く信頼し合える仲間との絆の証だ。たくましい高校生の姿にも刺激を受けた。

一番の思いでは「修学旅行」。頂上には立てなかったが、チャレンジすることの価値を教えてくれた富士山。東京で活躍されている大分県先輩方から伺った「仕事の流儀」。この4日間の体験は、きっとこれからの人生の糧になるに違いない。

最後に、ここにしかない教科「コミュニケーション」。人前で話すのも、原稿用紙を見るのも苦手だったのに、大勢の人の前でスピーチセッションするのが楽しい。自分の気持ちを文章にして読んでもらうのがうれしい。楽しみながら、いつの間にか力がついていた。

大分豊府中で得たものは、一生モノの宝!

(大分豊府中学校平成22年度学校案内「羅針盤」)

【注】

- *1 2010(平成22)年2月発行の別府大学短期大学部紀要第30号 p.143-p.53
- *2 表中の「道」は「道徳」、「選」は「選択科目」、「コ」は大分豊府中学校の学校設定科目「コミュニケーション」、「総学」は「総合的な学習の時間」のことである。

【参考文献】

- ・大分県教育委員会(1998)『平成20年度基礎・基本の定着状況調査報告書』
- ・大分県教育委員会(1999)『平成21年度基礎・基本の定着状況調査報告書』
- ・大分県立大分豊府高等学校(2007)『研究紀要第21号』
- ・大分県立大分豊府高等学校(2006)『平成18年度学校要覧』
- ・大分県立大分豊府中学校・大分豊府高等学校

- (2007—2010) 『学校要覧』 (平成19年度～22 年度)
- ・大分県立大分豊府中学校 (2006～2008、2011) 『学校案内』